

劣化する香港のスピード感

● 放 眼 日 中



少し前の話になるが、旧正月直前の2月初めに香港に行った。香港といえどスピードが命。一分一秒でも早く動き、隙あらば儲けるといのが香港スタイル。バブル時代の日本をも凌ぐ世界最速ではなかったかと思っている。一度慣れてしまえば、このスピード感がたまらなく心地よい。逆に日本に帰ると、どんどんスピードが落ちていくことを改めて認識させられた。

旧正月前のせい（バーゲン目当てか）、フライトがいつもより多いのかもしれないが、ターミナルには前の便の荷物がたくさん残されたまま回っており、その引き取りが済んでいない。そこへわれわれの便の荷物もどんどん落ちてくるのだから、たちまちいっぱいになり、自動化された荷物の配給はストップしてしまう。普通なら前の便の荷物を脇に寄せるはずだが、なぜやらないのか。

係の人は、どう見ても60代の小さな女性がただ一人。大きなトランクなどは、とても持ち上げられないのだ。客からの厳しい視線を浴びた彼女は広東語で「私一人ではこんな荷物、捌き切れるわけないよ」と叫んでいる。周りの客が一部手伝っているが、根本的に前の便とごちゃごちゃだからどれを取り出してよいか分からず、結局30分も待つことになってしまった。

日本でも中国でも、そして香港でも起こっている労働力不足。特に若者は肉体労働を嫌うので、給与が多少よくても働き手は少ない。香港ではこの手の仕事は前から外国人労働者に委ねられているが、さすがに空港では外国人労働者を入れられないのだろうか。これが今の香港の一つの厳しい現状だと思う。

外へ出るとスマホのシムを買う。面倒なので一番大きな会社のブースに出向くのだが、毎回同じシムを勧められる。今回は滞在がわずかに3日なので、もつと安いのはないかと聞いてみたが、「これが一番だ」とやはり同じものを勧めてくる。そのベテラン女性が他の客の相手をした隙に、若い店員に聞いてみると、「もつといいのがあるよ」と出してくる

ではないか。香港人は商売上手、というよりかなり強引だ。だがそれも行き過ぎてしまうと、快適さがなくなり客を失いかねないが、旧態依然としたサービス姿勢は直っていないようだ。また、香港の老舗レストランのサービスでは、欠けた皿や横柄な従業員の態度は今やオールド香港を懐かしむ向きにはよいかもしれないが、地価の高騰と相まって、その姿を消しつつある。代わりに、レストランチェーンが立ち並び、どこへ行っても均一の料金とサービスに収まってしまった。

中国との難しい関係を迫られている香港ではあるが、その圧力の中で自らの動きが鈍くなりスピードが感じられなくなっているのは、オールド香港ファンにとってはかなり残念でならない。



コラムニスト・アジアウォッチャー
須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。